

## 暦（こよみ）と、松笠の暮らし（その10）

旧暦（太陰太陽暦）の暦は、太陽と月の動きを観測し、暦法と呼ばれる基準に基づいて作成されました。暦は、古くは京都の朝廷が作成していましたが、江戸時代になると、幕府がその仕事を担うようになり、作成された暦は、暦の出版業者に下げ渡され、業者が印刷し、販売しました。地域ごとに、江戸暦、京暦、伊勢暦などそれぞれ特色のある暦が発行されました。《図1》は、安政4年の京暦（きょうこよみ、きょうれき）です。年間の吉凶の方位、月の大小、毎日の干支や吉凶、二十四節気雑節などが、事細かに記されています。松江藩では、京暦が使われていたようですが、町家や農村で、暦が使用されていたことを示す記録も残っています。

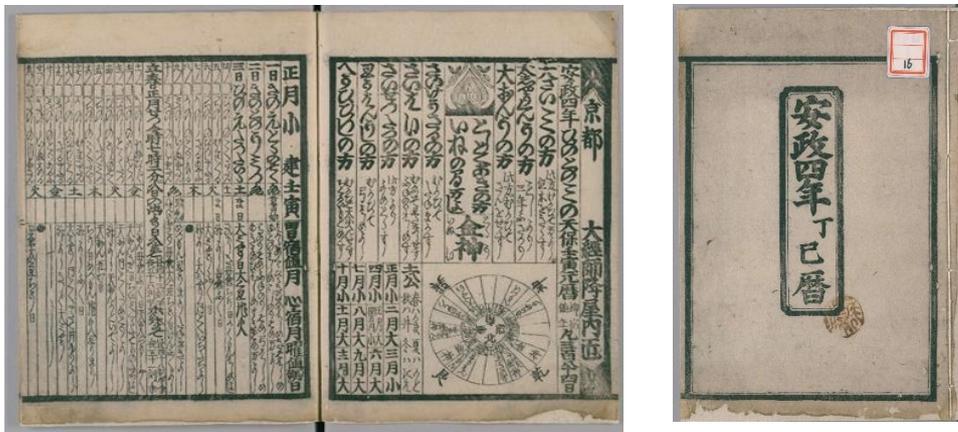
まず、松江の商家、和多見（わだみ）新屋（あたらしや）の手代を勤めた、町人太助が残した『大保恵日記』（おぼえにつき）。その嘉永4年のページに、「嘉永四辛亥年暦之大辻左二写ス」「正月大一日戊子・・・」と記しています。「大辻」とは、出雲弁で「オーツジ」のことで、暦の中から、主なことや要点を書き写した、ということなのでしょう。

もう一つは、菅澤村（現安来市広瀬町）の年寄、足立覚右衛門が残した『日記帳』。「年寄」とは庄屋の補佐役です。その日記の天保12(1841)年2月の部分には、作付けはこれまでの慣例よりも早めがいいと思うので、その旨を、「暦之下段に」記した、という記述があります。

松笠村でも、天満宮などの祭礼、農作業の計画、婚姻・葬式の日取りなどで、暦を使用する場面はたくさんあったはずですが、その実態を記した資料は見当たりません。今では、誰もがカレンダー（暦）を持っていますが、江戸時代は、庄屋や年寄といった、村役人のような限られた人だけが、持っていたのかもしれませんが。時代は下りますが、松笠村では明治になると、『農家年中行事表』（農事暦のこと）が役場から各戸に配布されたようです。

現在の生活の基本は、1年12か月365日、1週間は日曜日から土曜日までの7日という、太陽暦だけです。しかし、旧暦の時代には、祭礼などは、月の満ち欠けに基づく太陰暦を用い、農作業は太陽の位置を基準に定められた二十四節気を目安にし、さらに吉凶も考慮するといった、今から考えると、人々は、とても複雑で神秘的な世界に住んでいたように思えます。

暦のお話はひとまず終えまして、次回は新しいテーマで書いていきたいと思えます。



《図1》『安政四年丁巳暦』：国立国会図書館デジタルコレクションより